

ICFIA 97 私記

筑波大学化学系 手嶋紀雄

第8回フローインジェクション分析国際会議 (ICFIA 97) が、第28回フローインジェクション分析講演会 (28th JAFIA) との合同で1997年1月12日から16日にかけて米国フロリダ州オーランドのエンパシースイートホテル (同一名ホテルの存在によって珍事が生じることになる) において開催された。ICFIAとJAFIAが合同で開催されるのは前回のICFIA 95に引き続き2度目のことである。日本からの出席者は、本水先生 (岡山大) および酒井先生 (愛知工大) 両団長を筆頭に、河寫先生 (筑波大)、成澤先生 (立教大)、山根先生 (山梨大)、板橋先生 (群馬大)、樋口氏、井上氏 (東京化成)、浅野氏 (電気化学計器)、中西先生 (大阪電通大)、横山先生 (岡山理大)、今任先生 (九大)、手嶋 (筑波大)、それに同伴者1名の計14名であった。この人数は、参加12カ国中で開催国の米国に次いで2番目の人数であり、FIAにおける日本の活発な研究活動を伺い知ることができる。滞在期間は1週間余と短いものであったが、以下に記す珍事を含め実に様々な出来事が起き、貴重な体験をすることができた。本拙稿は、その一部を記した取り留めのない私記であることをあらかじめお断りする。

「Icing may be cause in fatal plane crash」この見出しは、1997年1月10日付の朝刊USA TODAYの一面に掲載された。当時アメリカの北部には、大寒波が押し寄せており、それが災いして小型飛行機の主翼および水平尾翼が凍り付きバランスを失って墜落してしまったとの記事である。乗客および乗組員合わせて29名全員の命が奪われたこの事故は、9日午後3時56分にデトロイト空港の南約40kmの地点で起きた。新聞を読んでわかったことだが、我々一行はちょうどその時刻に、乗り継ぎのためにデトロイト空港にいたことになる。大寒波が渡来していることは知っていたが、そのような大事故が起きていようとはその時は知る由もなかった。しかし、ここでのハプニングはこれにとどまらなかつ



た。いわゆる over booking である。4時半頃から身体の不自由な方、子供連れの人、座席番号の大きい人というような順で搭乗が始まった。我々の番号は若い番号であったので搭乗がかなり遅れたことはいたしかたないが、我々一行の大部分が搭乗したところで、搭乗不可能の状態となり、著者を含む5名（成澤，板橋，樋口，井上，手嶋）は先に搭乗した団員と離ればなれになってしまったのである。次の便に回されたわけだが、代償としてファーストクラスの座席と1人当たり\$400のクーポン券を手にすることができた。ところが、その便がいつまでたっても飛行可能とならず、結局デトロイト空港の床で6時間、搭乗後機内で2時間を過ごすことになった。デトロイト空港としては、その当日の飛行機事故のこともあって、気象条件を慎重に考慮したのだろう。とにもかくにも我々は、先の一行に遅れること約6時間でオーランドのホテルに深夜3時半頃たどり着き、無事再会を果たした。

学会に先立ち、フロリダ大学の Winefordner 教授の研究室を訪問する機会を得た。フロリダ大学は、オーランドから車で北上して約2時間の位置にある。酒井先生の留学先が当研究室であったことで、この訪問が実現したわけである。1枚目の写真はその時のものであり、左から2番目の方が教授夫人、3番目の方が Winefordner 教授である。同教授からの Invitation letter には、「my spectroscopy laboratory」との記述があったが、その名の通り TOF (time of flight) 型質量分析器など最新の分析機器が配備されていた。帰国後 Anal. Sci., 13(1)を眺めていると、同教授の論文が掲載されており、さらに親近感が深まった。ちょうどこのとき同大学のアメフト部が全米チャンピオンに輝いたばかりであり、大学内の売店では優勝記念グッズが多く販売されていた。

冒頭に本会議はエンバシースイートホテルで開催されたと記述したが、会議を明日に控えているのに、顔馴染みの学会出席者に誰一人として出会わない。著者も主催者の Christian 教授（ワシントン大）とは、名古屋で行われた 19th JAFIA とハワイで行われた PACIFICHEM 95でお会いしていたし、あの分厚い眼鏡は一度拝見したら忘れないはずである。この事態に本水・酒井団長が気付かれよくよく調べたところ、会議は別の場所にある同一名のホテルで開催されることがわかった。我々は急遽、宿泊しているホテルの予約をキャンセルし、参加登録当日12日に正真正銘のエンバシースイートホテルにチェックインした。言葉で書くと数行で済むが、両団長がホテル側へのキャンセル交渉や旅行会社との連絡などに奔走して下さったことには感謝の念を禁じ得ない。

こうして、皆が無事に会議初日のミキサーに出席することができた。この席で Tucker（豪、ディーキン大学）、Alexander 教授（豪、タスマニア大学）、FIA 創始者の一人 Stewart 教授（米、テキサス大学）と歓談させていただいた。特に Alexander 教授は、期せずして本誌前号のトピックス「電池で駆動するポータブル型 FIA 装置」に取り上げた論文の著者であった。また、河島先生がかつてニューヨーク州立大学バッファロー校の Rechnitz 教授（現ハワイ大学）の研究室に留学されたことがあるが、Alexander 教授も Rechnitz 研で研究をされたことがあることを最近知り、世の中狭いものだと驚いているところである。

ミキサーの翌日から口頭発表32件、ポスター発表21件が行われ、活発な議論が繰り広げられた。質疑応答では、日本でよく見られるように座長がその場を仕切るというより

も、講演者自らが質問者を指名するという形が多く、戸惑いと共に新鮮さを感じた。著者は英語による口頭発表は初めての経験であったのでかなり緊張し、質疑応答もスムーズに運ぶことができず、座長の酒井先生に随分と助けられた。講演が終わりその後にあった休憩時間に、Tucker教授自らが私の席に来てシーケンシャルインジェクション法でやってみてはどうかとアドバイスを下さった。講演内容に少しでも興味を抱いていただいた証拠であり、これには正直に言って本当に感動した。講演の一つにFIAのデータベースに関するものがあった。本誌のFIA Bibliographyに比べ現在のところ収録数は少ないが、インターネット上で閲覧可能なところが優れている。使用可能な方は、下記URLに是非アクセスしていただきたい。

<http://schalk.as.unf.edu/fad.html>

本誌のFIA Bibliographyも、これまで編集されてきた方々がお持ちのディスクを持ち寄ってデータベース化をするのはいかがなものだろうか。

会議の最終日は16日であったが、日本でのセンター入試に備え、著者を含め訪米団の多くは15、16日の講演を聴講することができずに帰国の途についた。これに加え、海外留学の経験がない著者は、自身の口頭発表に集中する余り、会議全体の内容を詳細に把握することができなかつたため、本拙稿によって会議の内容が十分に伝わらなかつたことをお詫び申し上げる。また、本会議に出席する機会を与えていただいた本水・酒井両団長そして参加者皆様の温かいご配慮に深甚の謝意を表す。

オーランドを去る朝ホテル1階で朝食をとっているときに、FIAの創始者Ruzicka教授とほんの少しであるが会話する機会を得た。これも著者にとってはこの会議に出席した大きな収穫である。

